

英国の助産婦と日本の助産婦、なにが違う

住田亮子

横浜市愛児センター助産婦

私は今年の1月10日～2月8日まで、横浜市の派遣でイギリス、シェフィールドにある「Jes-sop Hospital for Women」と「Doncaster Hospital, Womens Hospital」という2つの病院で研修する機会を得ました。ここで感じた日本とイギリスの助産婦の違いについて述べたいと思います。

まず助産婦数に大きな差があります。イギリスの人口に対する助産婦数は、日本の人口に対する助産婦数の11.3倍です。妊婦の診察は助産婦が最初に行ない、異常と判断した時、医師に診察を依頼します。分娩・新生児のケアも、正常では医師は介入しません。また助産婦はアロマセラピーや母乳育児などの専門領域をスペシャリストとして持ち、病院内で中心となってケアを推進、関連する研究も行ないます。そして「何%の人が……」「研究結果によると……」という裏付けに基づいた説明のできるケアが行なわれていることを実感しました。

また、たとえば母乳育児に関しても「イギリスの母乳育児に関するポリシー」という統一された方針があり、どこの病院で出産をしても、地域でも統一した指導が受けられ、母親が混乱しないシステムが確立しています。

両親学級も、普通の両親学級、経産婦のための母親学級、マタニティスイミングなど、さまざまなクラスを開いています。この他にも妊婦の希望によりクラスが設けられ、統一した考えを基盤に、決し

て押し付けがましい指導はせず、妊婦一人ひとりのニーズを大切にしたケアがなされていました。

助産婦が主体的に責任を持って、研究結果を重んじ、かつ母親の気持ちも大切に、母子中心の看護活動ができる背景には、充実した助産婦教育があります。クラスは少人数制で、学生時代の分娩介助経験数は、日本では正常分娩10例に対し、イギリスでは正常分娩40例以上、異常分娩

40例以上、合計100例の分娩介助経験が必要です。そして教師は、臨床をしながら講義にも携わっていました。さらに、助産婦となってからは1年ごとの免許更新制度があります。更新条件は研修会への参加ですが、この研修会への参加計画は、院内の教育担当者と一緒に立案するようです。

私たち日本の助産婦は正常・異常を区別する傾向がありますが、イギリスの助産婦が「正常・異常を問わず、妊娠褥婦・新生児がそこにいる限り、私たち助産婦の仕事よ」と話していたのが印象的でした。

実際のケアの場面を見て少々残念だったことは、私が訪れた病院では、夫が常に傍にいたためか、腰部マッサージをしたりしている場面がなかったことです。私が腰部マッサージを行なっていたら、「日本の助産婦にもすばらしい面がたくさんあることがわかった」と言われ、この点では私たちも、きめ細かい看護をしていることが確認でき、誇れる部分だと感じました。

